

書 評

片岡俊郎『備後福山、地方からの目』を 読んで

田 中 生 夫

I まえがき

本書は福山大学経済学部で貨幣論を専攻する片岡教授の異色の著書であって、後述のように、福山を考える「エッセー集」「第1集」というべきものである。最初に、目次の骨格部分（細目を省略）をそのまま引用しておこう。

はしがき

I 新しい都市像を求めて

- 1 福山青年会議所とともに
- 2 宮沢弘『地方都市ルネッサンス』考
- 3 奥村昭和『備後のシャカイ学』考
- 4 新しい都市像を求めて

II 福山と日本鋼管

- 1 朝日新聞『備後きょう・あすー日本鋼管』を読む
- 2 蓮見音彦編『地方自治体と市民生活』を読む

III 福山と鞆

- 1 鞆の古代
- 2 鞆の中世・近世
- 3 鞆の現代

人名索引

評者は経済学のうちでは通貨・金融を専攻し、主として制度や歴史の側面からのアプローチに従ってきたが、地域（都市）経済論は門外漢である。評者はまた、社会の思潮（思想）を文化に含めるならば、その限りでの文化に研究上の多少のかかわりがあるが、しかし文化についてうんぬんする能力をもたない。評者はさらに、岡山市に住んで長年になるけれど、遠距離とはいえぬ福山市については知識に乏しい。

小稿は、そのような評者が本書の読後の感想の一端をのべるものであって、以下、著者「はしがき」の紹介、本論の紹介、若干の感想の順序で進めることとしよう。

II 著者「はしがき」の紹介

「はしがき」はまず、貨幣論を専攻する著者がなぜこの仕事にとりくむかについて述べる。地方の大学では研究面での地方とのかかわりを欠かせないとの認識が根本にあって、これにもとづいて地域についての広い知識、しかも、理論と実践に結びついた知識を求めようとしているのである。本書の成立の根本動機である。

「はしがき」はつぎに、本書の成立の直接の由来についてのべる。福山市の旬刊経済情報誌である『経済レポート』に四年半にわたって連載中の「備後の経済学という目」の中から、福山市全体に関するもの、福山市東部、福山市南部について書いたものを取りまとめたものであるという。

「はしがき」はさらに、福山市の全体像を考える視角について述べる。中央の学者の目が日本鋼管福山製鉄所が立地する東部に向けられるのに対立して、また、郷土史家の目が千年の歴史をもつ南部の鞆に注がれるのとも異って、著者は福山市の全体像を市内の各地区の産業基盤の特色から把えようとする。本

書では、さしあたり東部（第2次産業）と南部（第1次産業、漁業・水産業）から始め、後に西部（第2次産業、地場製造工業）、北部（農林業）、中心地区（第3次産業、小売商業、金融等）へと広げようというのである。本書が「地方からの目」を副題にもつゆえんである。

III 本論の紹介

目次から明らかなように、本書の本論は3部から構成されている。そのそれぞれを順を追って紹介するが、3部の全体を通ずる著者の方法は、著書その他の文献にみられる考察や論議を紹介し、それを著者の前記視角にもとづいてコメントするやり方である。そのさい、著者の体験によるコメント風の感想を時どき織り込んでおり、これも付随的ながら本書の特色となっている。

1 「新しい都市像を求めて」

これは本書の本論の中の序章にあたる。ここでは、まず、福山青年会議所の社会開発室（昭和58年）、宮沢弘『地方都市ルネッサンス』（52年）および奥村昭和『備後のシャカイ学』（58年）を紹介し、それらを青年実業家、政治家（前広島県知事）および学者（社会学）における新しい都市像を求める諸相として整理する。つぎに著者の他の都市での見聞、すなわち、下関市での「人づくり」、萩市の「町づくり」、津和野町の「地方政府づくり」を追加する。その後で、経済学者である著者は、産業基盤から福山市内各地区を把える視角を提示している。そして、最後に「これまで時代をリードしてきた経済学の限界が叫ばれる」と一部にはいわれるが「人間を把握するグローバルな視点という意味からも、経済学はまだまだ捨てたものではない」と述べて、第I部を終わる。

片岡俊郎『備後福山、地方からの目』を読んで

2 「福山と日本鋼管」

第Ⅱ部は、朝日新聞（備後版）の連載記事「備後きょう・あすー日本鋼管」（57年）と蓮見音彦編『地方自治体と市民生活』（東京大学出版会・58年）を対象として、紹介とコメントを試みており、本書の本論の中心部分にあたる。

(1) 朝日新聞「備後きょう・あすー日本鋼管」

福山市が誘致した日本鋼管（36年誘致決定，41年鋼管操業開始，48年高炉建設完了）が不況におちいった時期（57年鉄鋼不況業種指定）において、鋼管依存型となった福山市（人口35万人のうち10万人が何らかの関係で鋼管に関連をもつ）の第1次産業、第3次産業、市民生活の人間関係、雇傭等に現われた変化（問題点）を指摘している。新聞記者の観察眼によるスナップ写真集といってよい。著者のコメントは、時にはスナップ写真そのものに向けられ（備後の中心都市としての視角からすれば、第1次、第3次産業への言及が不足）、時には福山市当局へ投ぜられているが、後者では特に手きびしい。行政当局者の条件として「政治倫理」というまでもなく、備後の中心都市としての福山市に着眼（鋼管一辺倒でなく）する必要性を強調し、鉄鋼業にかげりが出て直接それに影響されない産業基盤造り（具体的には中心商店街近代化促進等）での立ち遅れを指摘する。

(2) 蓮見音彦編『地方自治体と市民生活』

これは蓮見音彦東京学芸大学教授を中心とする社会学研究者チームが「地域政策の解明」を目的として、福山市の協力をうけ、昭和45―55年までの時期について実施した総合的調査の報告書である。上記の朝日新聞「備後きょう・あすー日本鋼管」とオウヴァーラップする部分をもつが、地域政策の解明を目的とするのであるから、おのずから対象とする範囲は異っている。ここでは、本書の他の部分と異って、細目目次を掲げておこう。

1 中央からの目

2 地域経済の変貌

- 3 製造業の変貌（Ⅰ）
- 4 私の「東京物語」
- 5 製造業の変貌（Ⅱ）
- 6 私のマーラー
- 7 商業の変貌
- 8 農業の変貌
- 9 私の教え子
- 10 地域社会の変貌
- 11 地方からの目

著者のかなり入念な紹介を読むと、報告書が持つアカデミックな調査としての手がたさが感じられ、評者には参考となることが多いのであるが、ここでは、3項目に限ってとり上げるにとどめよう。他は割愛するが、やむをえない。

① 報告書第1部第1章「地域経済の展開と特質」は、鋼管誘致による福山市の変貌をつぎのように要約している。備後地区工業整備特別地域に指定（39年）されたが、工業開発は鋼管進出だけにとどまった。鋼管進出は福山市人口を増加させ、一人あたり市民所得を増大させ、40年代には地域商業を成長させた。この工主商従型の発展につづく将来の課題としては、大型店進出による小売店再編成、新幹線停車、道路整備による商圈拡大等の新局面の下で、地域の安定、成長を第3次産業にまつということになる。（「地域経済の変貌」参照）

② 報告書第1部第2章A「製造業の展開と問題」2「鉄鋼業の立地とその波及」は、鋼管の鉄鋼メーカーとしての経営上の特質を分析している。鋼管は最新鋭の技術水準をもっているので、これに必要な関連企業と基幹労働力部分を県外からの移入に依存し、また、鉄鋼固有部門に専心するため補助部門を外注に依存し（下請比率61%）、しかも下請では一業種一社体制をとった。このことは、鋼管進出の地もと中小企業に対する影響調査の中にさまざまな形で反映された。その若干をあげると、鋼管と取引のある中小企業とない中小企業と

片岡俊郎『備後福山、地方からの目』を読んで

の間には、企業の性格（メーカーか、修理業か）、かかえている経営問題（受注難・単価切り下げか、同業者間競争激化か）、将来の経営問題（販売強化・自立化か、工程改善・開発か）において明白な差異がみとめられる。（「製造業の変貌（Ⅰ）」参照） ついでに一言すれば、報告書は、別の部分で、市の産業政策が必ずしも鋼管立地関連の政策に特化したのではなく、鞆や松永その他の工業団地の造成にも向けられたことを指摘している。（「製造業の変貌（Ⅱ）」参照）

③ 報告書第3章「開発・都市化と農業・農政」は、市の臨海工業地帯造成計画事業や都市計画区劃整理事業による農地の転用を含めて農業の変貌を考察し、30年代以後の市農政を4期に区分して50年代初頭以後を都市型農政への再編と規定した。（「農業の変貌」参照）

さて、ここで報告書に対するコメントをみることにしよう。報告書のいう市の将来の課題（小稿Ⅲ－2－(2)－①参照）に対する批評（報告書以後の産業構造の変化に照らせば視野が狭い）を別とすれば、細目目次にみられるように、報告書を「中央からの目」と評して、これに著者の「地方からの目」を対置していることの中に、コメントは要約されている。「地方からの目」が、朝日新聞の連載記事に対するものと同じ著者の前記視角であることは、改めていうまでもない。具体的には、報告書第1部第4章「地域政策と地域社会の変動」が、鋼管進出の地域社会への影響調査を鋼管立地の引野地区に限定したことへの批評に認められる。

ついでに、都市型農政に関連して著者の個人的体験をエピソードとして織り込む（「私の教え子」参照）等、個性ゆたかな感想記事がいくつかみられることを、付記しておこう。

3 「福山と鞆」

第Ⅲ部は、1 鞆の古代、2 鞆の中世・近世、3 鞆の現代から成る。南

部地区を対象としており、東部地区を対象とした第Ⅱ部につづく本論の中心部続編にあたる。

1と2は福山市観光課パンフレットを『福山市史』によって検討しているが、そのさい、中世の時期区分論や足利尊氏再評価論等の異色の要素が組入れられている。但し、第Ⅲ部は、鞆の近代史（明治一昭和前期）を省略している。

3 「鞆の現代」は鞆の鉄工業、漁業および観光を紹介している。とくに、古い鞆鍛冶の時代からの遺産である伸鉄業の現在の停滞についてはかなり立入った記述を加えている。

Ⅳ 若干の感想

著者による諸文献等の紹介とコメントの要点を以上において明らかにした。細部の多くを省略したが、やむをえない、いま、ようやく評者は感想を述べることができる。感想は3点に限ることとしよう。

第1は、総括的感想である。著者の紹介とコメントはどれも手ぎわがよく、また、全体の構成も考慮がゆきとどいており、著者の苦心と手腕をうかがうことができる。本書によって評者は福山市について多くの知識を得ることができた。とくに第Ⅱ部は地域研究の門外漢である評者にとっては、読みごたえがあり啓発をうけることも少なくなかった。著者の個性ゆたかなコメント風感想が散見されるのは、異色であり時には突出とみえることもあるが、もともと本書が地もと経済情報誌の連載記事に直接に由来することを思えば、読みやすくするための工夫と考えられ、それほど気にならないですむであろう。

感想の第2は、著者の視角に関するものである。福山市の全体像を市内各地区の産業基盤から把える視角は、当然のことと思われ異論はない。しかし、全体像をみるのにその視角だけで足りるのかということ、門外漢の評者にも疑問が残らざるをえない。

瞥見のかぎりであるが、今日の福山市で重工業の最新分野はもちろんのこと、金融・商業・情報等第3次産業の主要分野において、県外ないし県内他地域からの進出大企業が支配的地位を占める（地もと企業の劣位）事実は争えぬであろう。ところで、大企業が市財政等市内全域に対して提供する有形の貢献ならびに無形のサービスは相当に大きいと考えられる。その貢献とサービス（とくに先見性のある助言・調整等の機能）は地もと企業である場合の方がそうでない場合よりも大きいのではないか（統計的に立証できる性質のものではないが）と思うが、評者はこの問題をみずから検討したことはなく、また、学界の研究状況にも通じていないので、推定をいうほかはない。そして、この推定のままで、なお大企業が提供する貢献やサービスは、福山市の中心部だけでなく市の全域にかかわる問題として、市の全体像を考えるさいの一視角（著者の視角と並ぶか、これを補充する）たりうるのではないかと考えるのである。（著者はこの事実の問題を市の中心地区をとり上げるときの将来の課題として予定しているのかもしれない。評者はこの事実が広く市の全体像にかかわる事項ではないかと問うのである。）

さて、今日の福山市の主要産業における地もと企業の劣位の事実は、時代を遡るならば、近代産業の拡大・再編期であった大正期において、福山市地域には他地域に対しての立ち遅れがあったのではないかとこの疑問に通ずるのである。そして大正期の福山市地域についてのこの疑問は、同じ時期の岡山県倉敷町（当時）ならびに岡山県全体の経済界さらに政界や一般社会に対して倉敷紡績社長大原孫三郎が与えた貢献とサービスに、評者が注目することに由来している。そこで、感想がいささか拡大するきらいがあるが、大原のこの種の事項について、最小限のことを述べておきたい。

朝日新聞の連載記事「世界の中の関西」（23）企業編「大原美術館」（昭和62年11月13日）は、大原の芸術や学術研究への援助活動を、大原の「資産の社会還元」の思想から説明している。それはそのとおりであって異論はないが、す

でに周知された事項であろう。重要なのは、経済界等に対する実業界第1の実力者としての大原の知られざる貢献とサービスであろう。これについても詳細は『大原孫三郎伝』（昭和58年）にゆだねるほかはなく、ここでは、つぎの2項目を紹介するにとどめたい。

第1は、岡山染色整理会社の創設（大正7年）である。これは、県下の織布業を海外輸出向けに指導誘掖するために、模範的な綿布織布および染色整理加工（後に紡績を追加）を営む企図のもとに、県下の有力実業家のすべてを動員して設立された。この会社の創設当初の意図が世に知られることの少ないのは、恐らく、創設後間もなく発生した大恐慌によって意図がそのままの形では実現されなかったためであろう。

第2は、第一合同銀行（現在の中国銀行の前身）の創設（大正8年）である。大原は自分が主宰する倉敷銀行（本店倉敷町）を中核として、備前・備中・備後に分立する小銀行を合同して地方的有力銀行を新立する計画をたて、大正8年、まず倉敷銀行が福山貯蓄銀行を吸収したのに続いて、6銀行の合同による第一合同銀行（本店岡山市）の新立に成功した。この銀行合同は、岡山県下最大の地もと銀行であるが当時すでに安田銀行（本店東京市、現在の富士銀行の前身）の傘下に入って地もと銀行の実質を稀薄にしていた二十二銀行（本店岡山市）に対抗する勢力として計画され、また、県下産業向けの資金供給の積極化を企図していたのである。

感想の第3は、本書第I部末尾の「これまで時代をリードしてきた経済学の限界が叫ばれる」と一部でいわれているが、「人間を把握するためのグローバルな視点という意味からも、経済学はすてたものではない」との著者の言葉に関連する。

本書は第I部で青年実業家や学者や政治家の新しい都市像を求める諸相を紹介し、第II部ではそれらに対して経済学によるアプローチを対置するために、第I部末尾にこの言葉を置いたものと、評者は当初は単純に考えていた（小稿

Ⅲ－１、参照)。しかし、これとは別に、この言葉の前段の「経済学の限界」うんぬんを今日の学界でいわれている通常の意味に解するならば、後段の「経済学」は何を指すのかがわからなくなるのである。

1930年代の不況期に需要面に注目した「ケインズの経済学」(理論)と戦後の「ケインズ派の経済学」(理論体系)・「ケインズ主義」(総需要管理の政策体系)とを区分した上で、「ケインズ派の経済学」に対して理論的整合性を問う型の批判と政策的限界性を指摘する型の批判(まず、金融市場に注目する「マネタリズム」、ついで、供給面に注目する「供給の経済学」ないし「レーガノミックス」)とが登場した事実、つぎに、その「レーガノミックス」が近時にいたって破綻をみせるにいたった事実、これらの事実を照らして「ケインズ派の経済学」も「レーガノミックス」も政策指導の権威を失ったというのが、通常の見方であろう。そうであれば、著者がすてたものではないという「経済学」は、上記の四つの型の経済学のうちどれなのか、それとも範疇を異にする広義の経済学なのか、このことが判然しなくなるのである。

いずれにして、重要な意味をもつはずのこの言葉が無造作にいられているとみえることに対して、本書が経済情報誌の連載記事に直接に由来することを考慮するとしても、評者は戸惑いを覚えるのである。

V むすび

以上をもって本書の紹介と評者の感想を終わる。評者は本書によって福山市について多くを学ぶことができた。本書の啓発的意義は少なくないであろう。評者はまた本書への疑問として2項目をあげた。著者の他日の一考を得られれば幸いである。

最後に著者における本書成立の根本動機の問題が残っている。著者は地方の大学の教員として、専攻分野の研究のかたわらに、研究面での地方とのかかわ

片岡俊郎『備後福山、地方からの目』を読んで

りの必要性を認識している（小稿Ⅱ参照）。新しい時代が進むとともにその必要性はいっそう高まるであろうことを思えば、妥当な方針であろう。

以上を最終的に総括すれば、本書は著者の福山市を考える「エッセー集」「第1集」であるということになる。評者の小稿は書評というよりはむしろ書評風エッセーであろう。（成経堂、昭和62年、255, 3ページ）

（昭和62年11月）